みんぱくリポジトリ
国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnolo

# コメントと討論



| メタデータ | 言語: Japanese<br>出版者:<br>公開日: 2012-05-18<br>キーワード (Ja):<br>キーワード (En):<br>作成者: 塚田, 誠之, 野本, 敬, 卡⊠, 娜<br>メールアドレス:<br>所属: |
| --- | --- |
| URL | https://doi.org/10.15021/00000930 |

野林厚志編『東アジアの民族イメージ ―― 前近代における認識と相互作用』
国立民族学博物館調査報告　104:49-57(2012)

# コメントと討論

**塚田　誠之**
国立民族学博物館

卡丽娜先生と野本先生の大変興味深い報告をうかがいました。卡丽娜先生の報告では，エヴェンキ族を対象にした近現代の民族関係史，とりわけ清朝，モンゴル，漢族，朝鮮半島の高麗など周囲の民族との多様な関係，あるいは交流関係を，長いタイムスパンをとって検討されました。また，野本先生の報告では，清代中期以降の雲南の土目，土司の動きから中国王朝と彝族との関係を検討されました。ここでは，南北の状況の違いを踏まえながら6点ほどコメントも合わせながら質問をさせていただきます。

第1点として，土司，権力システムの問題にふれたいと思います。こういう間接的な統治政体の存在が前近代に特徴的であると思われます。野本先生の報告からは，土司は雍正年間の直轄地化以降はかなり権威が低下したことがわかりました。一方で小粒な土司は残存した。ほかの地域でも中国南方では似たような状況が見られました。私の研究している広西チワン族自治区でも，雍正の「改土帰流」で大物土司が大体消滅しています。しかし，とりわけベトナムとの国境地域で，緩衝地帯として小粒な土司が残されます。ただし雲南では，ビルマとの国境地域に比較的大型の土司も残されたと思います。ともあれ，土司という間接的な統治政体は残されますが，清代中期にはその権威は低下して，総じて小粒なものになっていく。それは国民国家への過渡期の現象かなと思われます。

1つ目の質問は，そうした状況下において，例えば北方ではどういう統治体制にあったのかということです。卡丽娜先生の報告では，エヴェンキ族が清朝の八旗に編入されたことが報告されていました。八旗に編入されたということは，直接統治に近いのか，あるいはもともとの氏族社会を保ったまま編入されたのか，そういう意味では間接統治なのか，その点についてはいかがなのでしょうか。最初に見せていただいたスライドから解釈しますと，ソロン・エヴェンキは牧畜生活を行っておりますので，非常に緩やかな間接統治だっただろうと推測することができます。これらエヴェンキ諸集団に対する支配のあり方，そして，清代中期ぐらいにどのような体制だったのかということを卡丽娜先生に質問させていただきたい。これが第1点であります。

2点目は，漢化という問題について質問したいと思います。歴史の大きな潮流としては，特に中国の南部で非常に早い時期から漢化現象というものが見られます。しかも，野本先生の報告にあったように，単に非漢族側が一方的に受け身で漢族の影響を受け入れただけではない。土目が漢文化を主体的に取り入れて，漢文史料を残していった。あ

るいは，文書行政システムを取り入れていった。このように，漢文化というものを戦略的に利用していったと考えられます。そのことは大変興味深い現象だと言えます。

その場合，本日の報告では，土司社会における階層差をどのように考えればよいのかという問題が生じます。一般論としては，土司の上層部，例えば那氏土目でしたら，上層部は進んで主体的に漢文化を取り入れていく。しかし，一般庶民はどうであったかという問題です。私の調査している地域では，チワン族の土司，統治階層にある者は，漢族式のものをどんどん取り入れていく。そして，漢人の模倣をしていく。しかし庶民は，逆に土司によって漢化を規制され，結果として民族文化をより濃厚に保持するという状況が見られます。一般の人々，庶民レベルでの，エスニシティや民族の認識を解き明かすということがこのシンポジウムの趣旨の一つでもありますので，階層による漢化の受容の仕方というのは非常に重要な問題になろうかと思います。この点をうかがいたいです。

卡丽娜先生に対しましても，報告の中では直接は触れられなかったと思いますが，配布資料にはエヴェンキの中でも上層部は生活様式が満族化していったと書かれています。満族は，清朝中期になると全体的に漢化していきます。エヴェンキも，おそらく満族化して，さらに漢化する方向をたどると推測されます。その点につきまして確認させていただくとともに，漢化に関する上層部と一般庶民の受容やスタンスの違いをお聞きしたい。これが２点目の質問です。

３点目は，これも報告では直接触れられていなかったですけど，ぜひ私が聞いてみたいと思うことで，非漢族の社会の特徴についてです。土司が拠って立つ基盤となった地域社会にはどのような特徴があるのかということです。野本先生の報告では，土目社会の自律性の強さが指摘されていたと思います。そうした自律性の強さが彝族社会における自然村落のあり方とどのように関わってているのかということは興味深い問題だと思います。

先ほどの漢化と関連させて言いますと，私は，その民族が漢文化の影響を受ける場合，表層部分は漢化されても，漢化されにくい部分，強靱な部分が社会，文化にあると考えています。例えばチワン族の場合ですと，それぞれの村落の独自性が非常に強い。それぞれの村落には年齢集団があり，男性も女性も子どもの時からそれらに加わって，男性でしたら一生つきあいが続きます。女性は，結婚と出産を契機として年齢集団は解体するのですけれども，そうした村落社会における結びつきがある。南方の民族の場合，宗族，つまり父系的なリネージの結びつきについても留意しておく必要があって，漢族の場合，宗族は強固です。しかし他方，非漢族の場合は，一般的に言って宗族の結びつきは弱く，自然村落における内部の結びつきが非常に強い。その結果，村落の自律性が非常に強いということになります。この点につきまして，村落の内部のありようとその自律性の強さとの関わり，ひいてはそのことが南方で広い領域を持った独立的な政権が成

立しなかったことにつながるのかどうかを質問したいです。

野本先生の報告では，彝族という民族は同族同士の団結が非常に弱い，そして超越的な権威というものがないということが対立の要因とされていましたが，他方では土司を支える基層社会に何らかの特徴があって，それがそうした土司の対立的な様相を生じさせる要因になったと考えられないかということであります。

北方でもそういう問題は考えられると思います。ソロン・エヴェンキですと，基本的に牧畜生活を行っています。そうしますと，村落内の結びつきは非常に緩やかだと想像されます。そのように考えると南のほうに比較的，内部の結びつきの強い村落があって，北のほうでは比較的緩やかな流動的な社会がある。そうした理解でよいのかということを卡丽娜先生にうかがいたいと思います。

第4点は，移民や交易とかかわる問題です。野本先生の報告では，四川から炭焼き職人が流入してきたり，鉱山の労働者や流民に至るまでいろいろな人々が入ってきます。それに対して，那氏一族の中でも森林資源を移民から守り得た人間もいる。他方では，森林を売却してしまった者も出てきています。こうした移民への対応，交渉関係にも着目したい。

広西チワン族自治区では，清代中期以降，広東人が大量に入ってきます。そして，彼らが商業活動を行って，広西に住んでいたチワン族の土地をどんどん入手し，経済権を握っていく。小粒の土司も彼らに土地を取られて，権力構造が弱くなっていくという現象が見られます。したがって，商人がやってきて交易をするということは，決して平和的な物の交換にとどまらないと言えるのです。いわば，経済的な支配・従属の関係にもつながっていくことになります。こうした点について，南北でどのような状況が見られるのかということをお聞きしたいと思います。

南の彝族地域では，そうした漢族の商人や移住民に対して，果たしてどの程度独立性を保持することができたのでしょうか。北では，清代中期以降，道光年間に農地解放が解禁されてから山東の漢族が多く入ってくるということは，先ほどカリナ先生の報告にありましたけれども，そうした情勢においてエヴェンキ側の社会における権力構造が温存されていくのか，あるいは破壊されるのか。そのあたりの清代中期以降の状況をお聞きしたいと思います。

第5点は，今日のシンポジウムの柱の1つとなります相互認識の問題です。周辺民族と中央との間の相互の認識について質問をしたい。中央から周縁に対するイメージは，ともすればステレオタイプなものに収斂していきがちでした。野本先生の報告では，野蛮な，遅れた，あるいは生きた化石とか，そういうイメージが周縁民族に与えられたものとして強かった。そういう伝統的なイメージというのは，儒教的な規範があるかないかを基準としているわけです。こうしたイメージが，19世紀以降になると，どういうふうに変わっていくのかという問題があります。

19世紀に清朝が多民族併存という現実の問題に直面した時に，ステレオタイプ的な民族イメージが変化せざるを得ないよう推測されます。こうした過渡期において，たぶん野本先生が指摘されたような二面性が出てくる。「自分たちは少数民族です」という言説と「自分たちは雲南の民です」という，非常に戦略的な，したたかな，二面的な主張がなされるのではないかと考えられます。ステレオタイプだったイメージが清代中期以降に変わっていくのかどうか，そのあたりの確認をさせていただきたいと思います。これは，国民国家がどのように形成されていったのか，その過渡期を考える上で大変重要な問題であります。

北のほうにつきましては，野人というイメージが付与されておりますけれども，エヴェンキの自己認識のありようはどうだったのか。さらに，他者に対する主張の仕方に両義性があるのか。場面に応じて，「自分たちは八旗です」と主張したり，「自分たちは野人です」「少数民族です」と主張したり，そうした両義的なものがあり得るのかどうかということです。５番目の質問を要約すると，自己認識のあり方と，他者，中央に対する主張，そしてそれが19世紀にどう変わっていくかということであります。

６番目は，このシンポジウムは，文献史料以外にも口頭伝承，あるいは技術・物質など多様な媒体から見えてくる民族間関係，中央，周縁関係を見ようということでありますので，それに即して質問させていただきます。卡丽娜先生の報告では，エヴェンキのシャーマンの服が高麗人とダフールの影響を受けているということが指摘されました。シャーマンの言語としてはモンゴル語が入ります。それから，チベット・モンゴル仏教の信仰がモンゴルから入ってくる。これは大変興味深い現象です。その時に，それらに対して民族の側の言説としてどのような状況が見られるのか。「モンゴルから受容した」というのは，第三者から見た見方なのか，あるいは自分たちがそう見なしているのかという問題があります。それとともに，モンゴル語とかダフール語というものはいわゆるソフトであって，ハードとしての文化というのは自分たちのものなんだという認識を持っているのかどうか。そのあたりを卡丽娜先生にぜひ質問したい。

それから，彝族の場合には，おそらく民衆道教の影響が漢族側から入ってくると思います。きょうの報告では，祭司（ビモ）による独自のシャーマニズムが彝族の宗教であるかのようにお聞きしたのですけれども，漢族の民衆道教が入ってくるかどうかということも，ぜひ質問してみたいと思います。

最後に口頭伝承についてです。特にエヴェンキのようにモンゴルと満族とに挟まれた弱小民族の口頭伝承はどうなのか，少しでも結構ですので紹介していただければと思います。例えば広西チワン族自治区のヤオ族にこういう伝承があります。ヤオ族は，山の上に住んでいます。チワン族は，山の麓に住んでいて，土司に任じられて権力を持っています。漢族も山の麓に住んでいて，商人として入ってきて土地を持ちます。

昔，漢族とチワン族とヤオ族は，３人の兄弟だった。分家する時に，土地の親玉が分

家の時に与えるものを３つの籠に入れて蓋をして選ばせた。ヤオ族は，担いでみて最も重いものがきっとよいはずだと思って選んだ。漢族とチワン族は，軽いものを選んだのです。籠を開けてみると，ヤオ族が選んだ籠には斧とか鉈，漢族とチワン族の籠には書籍とか土地契約書が入っていたんです。こうした結果，ヤオ族は山に住んで土地を耕す。チワン族や漢族は，土地契約書を握って土地を保有することになった。これは，歴史上起こったことを巧みに取り入れている伝承であると私は考えています。こうした歴史的な勢力関係の変化に関する伝承がモンゴルと満族との間に挟まれたエヴェンキのもとにもしありましたらお聞きしたいです。

# 討　論

**野本**　塚田先生のご質問はどれも答えるのがなかなか難しい質問なのですが，お答えできるところからはじめたいと思います。

地域社会に対する移民と交易，確か４番目のコメントだったと思いますが，商人が結果としてその地域社会を中央の市場に従属化させていく機能を担ってしまうというのは，中国の南部，雲南省でも顕著にあらわれてくる状況です。ただ，ここで注目すべきは，専業の商人というわけではない，本当にわずかな物資だけを担い，着の身着のまま一か八かのような形でやってくる，「冒険商人」のようなものが多数存在していたと考えられる点かと思います。

少数民族の地域に入ってくる場合，現在東南アジアの山の中で突然中国人の担ぎ屋があらわれ日用雑貨を山住まいのヤオ族の村に売っていたりするように，同じような状態がおそらく清朝中期ぐらいからあって，針と糸のようなものを持ってやってくる。少数民族にとって入手しにくい物資を持ちこむ商人が，政府のコントロールをほとんど受けずに動いていて，やがて現地の女性と仲よくなり，今度はその女性のネットワークをたよって村に住みつくようになる。村に住みつくと，今度は同郷なり同業なりの知り合いがつてをたどってどんどんやってきて，その後は王朝の権力をバックにした文書等でだまして土地を巻き上げてしまう。こうした過程で地域のヘゲモニーを握っていく，これはそのままの記述が中国の歴史書の中に出てきて，官の側もそうした動きを非常に問題視していたということがあります。この動き自体は，南方の場合地理的には中国の範囲を越えて東南アジアまで拡大していき，現在でもまだ進行中だと考えています。ただ，例えば中国の場合，現在の中国の版図からラオス，ベトナム，ビルマのほうに動いていく平面的な広がりについては，ある程度理解しやすいのですが，その中で飛び地のように残されたところがある。山の上にあることで結果的に開発が後回しになった彝族の住んでいる地域，そういった国内フロンティアで地域社会がどのように独自性を保っているのか，いないのかというのは，今から研究をする必要がある部分と考えます。なお，雲南の場合には，長江をさかのぼって江西，湖南，それから隣接する四川，貴州，そのあたりから移民が入っていって，さらに東南アジア方向に広がっていく。清朝中期から現代に至る過程としては，そうした動きがあると思います。これで４つ目の質問の答えに代えさせていただきます。

３番目の質問にありました，土司の拠って立つ地域社会とはどのようなものだったか。これについては，具体的な様相はわかりづらいのですが，その地域の地域リーダー，例えば武定の土目でしたら那氏ですが，彝族の土司の下ではそうした地域リーダーの家系と，それを支える職掌の分担というのは，かなり組織的にできていたようです。そして，

一定の階層差というのも，その構造に反映していたようです。ただ，それが庶民のレベルまで，それから自然村落とのかかわりの中で，具体的にどのようなかたちをとっていたのか，機能していたのかは現段階ではよくわかりません。

那氏土目のケースで興味深いと思われる点では，実際の職掌自体は，漢族の地域で村役人である郷約などが担っていた役割と非常に類似していることです。実際，那氏土目で中国式の身分を志向した人物が亡くなった後，王朝の側でも，その継承関係をどうするか若干戸惑った形跡があります。「土司の職掌ではなかったが，地方を管理する責任があるので，然るべく跡継ぎを探さなければならない」という官側の文言などが関連する史料に出てきます。それを考えますと，機能としては漢族地域と共通してくるところもありつつ，それを完全にシステム的に代替させることはできない何らかの要素がどうもあるのではないかと考えられます。その意味で，自然村落の一定の自律性や，漢族の郡県制支配と単純に同じにはできない何かがどうもあるような印象があります。

次に，２番目の漢化の問題，階層による漢化受容の差異があるかどうかですが，漢字で表現する際には，その階層差が明確には表出されません。すべて漢姓もしくは当て字で人物の名前が出てきますが，彝族の観念の中で系譜のランクがどのように位置づけられているかというのは，彝語で書かれた語りを分析しないと，おそらく十分には見えてこないのではないかと思います。現段階では，漢文化をそれなりに使いこなして戦略的に立ち回ったのは，土司・土司に準ずる親族，それから結婚相手になる家系です。同民族，同階層内でないと結婚しないという伝統は中華民国時代まで彝族が相当に厳格に守ってきていて，今でもその名残はあります。そういう点からすると，上層階層には，漢文化の受容が見受けられますが，一般庶民のレベルだとどうだったかというのは現段階ではわかりません。

５番目の，周辺民族との互いの認識，民族表象，イメージといったものについてです。これは周辺民族との相互の関係が含まれると思いますが，その時の公権力，政治的なコンテクストによって初めて露わになる部分だろうと思われます。彝族の場合，これらは近代になってからかなり明確にあらわれてくるようです。基本的には前近代では漢と彝ぐらいしか明確な使い分けをしないのですが，自分たちのルーツを名乗って堂々と押し出していくという手法は，民国期になってからです。彝族の土司の末裔を中心とした階層が軍人に応募するルートをたどり社会上昇を果たしてくるのですが，士官学校で学んだ彼らが，自分たちの神話に由来する「竹王会」というのをつくり「彝族ここにあり」というのを大いに喧伝しようではないかと企画します。ところが，当時漢民族による国家復興を掲げていた民国期の社会的雰囲気からすると摩擦の原因になる，と彝族出身でその後，雲南省の省長になった龍雲が制止して沙汰止みになりました。周辺民族の互いの認識は，その時の政治的なコンテクストをいかに彼らが読み替えて利用しているかを理解してからでないと，容易に論じることはできないと思われます。

6番目の質問について，彝族の宗教に民衆道教，民間信仰の要素がかなり入っているというのは，既に他の研究者の先行研究でも取りあげられています。印象論ですが，彝族の文化，文字をつくり出したこと自体も，結局，中国王朝と早期に接触して，そこから文献の大々的な生産などがなされていったということがあります。彝族文化のかなりの部分が中国文化のインパクトを受けて，ある種の対抗意識を持って生み出されたものではなかったかと考えています。

チワン族の場合，清朝の統治下に入った後，科挙を通じて社会上昇を図るということがありますが，彝族の場合それは比較的希薄で，あまり事例が多くない印象です。貴州では科挙を受験する事例もあったようですが，全体として彝族出身の文人で科挙に合格し，ほかの地域に任官してまた戻ってくるという事例は相対的に少なかったようです。彝族自身は，中国文化・漢文化とどこかで対抗的な何かを内に秘めていて，中国文化に適応はするけれども，全面的に合わせていくような指向性はあまりあらわれてこない。単純なコンテクストだけでは説明し切れない，彝族の何かしらの特質があるのかもしれません。

少し的はずれなところもあったかもしれませんが，随時ご指摘いただければ幸いです。以上私からの回答とさせていただきます。

**卡丽娜**　満族文化の浸透については，特に農業区の人たちが普遍的に影響が大きいです。牧畜区の住人のほうが上層管理部の人たちの影響が大きいと言えますが，ただしツングース区のシカを飼っているエヴェンキ人は，その影響が最も少ないと言えます。なぜかと言うと，この人たちは，主に森林地区で生活していて，ある種とても閉鎖的，伝統的な生活をしております。ふだんあまり森林から出ないという点では共通していますが，異なる影響を受けた異なる生活者集団，民族もあったと思います。特に八旗に編入された人たちは，満族の文化教育を受ける必要がある。つまり，森林の中のタイの売買貿易に関係があると思います。森林に入る前にカーソーというところにリーダーがいて，その人たちは満族語を勉強しなければなりません。

具体的な満族語教育を受けている人たちのデータは，あまり詳しく調べたことはありませんのでお答えすることは難しいです。

ちなみに元朝政府は，エヴェンキ人の狩猟をとても遅れている生活様式とは考えていなかったと思われます。元朝の人たちはエヴェンキ人に対して「兀良哈」という呼称をあたえ，元朝とエヴェンキ人はお互いに尊敬していたという特徴があります。明朝時代も特に強制的な関与がなかったという一つの理由は，明朝政府は，当時，内政の状況と外部からの影響で政治状態はとても不安定であり，女真の人たちに対しても特に干渉しなかったようです。清朝政府は，エヴェンキ人を一つの民族集団として認識し，特に狩猟民族であったエヴェンキ人に対しても遅れている人たちとは考えていませんでした。

エヴェンキ人は，狩猟と牧畜とを相補的に組み合わせていた自然環境に適応した生活様式を保っていた人々です。この３つの時代は，エヴェンキ人は他の民族とお互いに尊重した状況にあったと考えられます。これは，もしかしてそれぞれの民族の素質ではないかと私は思います。

山東人の浸透は，一番影響が大きい事態は中華人民共和国建国以降と考えられます。山東人はもともと農業の基盤を持って東北地方にいて，エヴェンキ人は山東人の農業に適応できなかったですが，建国以降，2006年の山東人の 60.39％は漢人です。漢人の浸透は数字からわかりますが，1957年には漢人は13％を占めており，エヴェンキ人は27％だったのですが，2006年は 60.39％にまで上って，エヴェンキ人は逆に7.17％しかいません。

私たちは，主にツングースの比較的高齢者を対象に調査を行いました。これらの人たちによると，当時はシャーマンの宗教を強制的にやめさせられ，統制された信仰に強制されたということがありました。

**野林（座長）** 残りの質問については，明日の総合討論の時にふれていただきたいと思います。